

川を掘ると言っているが、幅はせいぜい三十センチメートルで、深さもスコップひとつが入る程度。それじゃ川というより溝ではないかと言われそうだが、そもそも水源が側溝を流れる水なのでしようがないのだ。町内のMさんからも、もっと広くしないのかいとダメ出しされているが、こればかりはどうしようもない。川幅を広くすればその分水深が浅くなり、夏の水が少ない時に川底が露出してしまう可能性がある。そんな規模だが、私たちにとっては立派な川なのだ。

時々、溝を水たまりまで掘ってもたまった水がうまく流れないことがある。原因は勾配が上流から下流にうまく取れていないからなのだが、どう修正すれば良いか。最初のうちは山勘であちこちスコップでさらってなんとか流れるようになっていたが、そのうち溝を掘る段階で足の裏の感覚で傾斜を把握できるようになってきた。人にはまちなかの生活で使わなくなってしまう感覚がいろいろ眠っているんだと思う。何かに夢中になってそれが蘇るのは気持ちが良い。これも原始的試行錯誤法の良いところか。

この方法の良いところはいろいろある。そのひとつに川のルートデザインがある。最初から計画的に掘り進めようとする と 全長の高低差と比較して程よい高低差の二点を探して、その間を直線的に掘ることになる。そうすれば結果的に最短のコースとなり労力も節約される。ただ、人工的な水路のようなデザインになってしまう。そこに曲線を入れようとする と わざとらしくなる。それに対して原始的試行錯誤法は、自然にできたくばみを読み取りそれを繋いで掘っていくのでその地形に合わせて自然と水が流りたい形になってくる。そもそも自然に川が流れをつくっていくのと原理は似ていて、自然の川は上流から形を決めてくるが、原始的試行錯誤法は下流からつくっていくという違いだ。

家の近くに川を掘る際には、掘った土を家側に堤防がわりに積んでみた。川を掘ったために増水時に家のまわりが水浸しになっては元も子もない。川上に行くにしたがって勾配も急になってきて上流の雰囲気が出て来た。結局、水源の側溝に行き着くまで四日で済んだ。あとは、側溝に堰をつくってコンクリート壁を壊すだけだ。コンクリート壁を壊すのには外かまどを作る時に手に入っていたコンクリート用のノコギリとタガネが役にたった。切れ目を入れたコンクリート壁に最後、金槌を打ち下ろすと側溝から掘った溝に水が流れ始めた。流れ落ちると溝の幅に水が広がって行くのを確認しながら、川に沿って下流まで辿っていった。途中勾配がゆるくなるあたりからは流れのスピードはゆるくなったが止まることはなかった。家の前のひらけたあたりを過ぎ、木々の間を縫うように流れ、一番下流の少し太い溝までたどり着き、源流の側溝と反対側の側溝に流れ落ち、川は貫通した。

上流の勾配が比較的急なあたりに掘った時に出て来た石を積んでみたら、そこを水が流れ落ちる時にチョロチョロと明るい音が聞こえるようになった。妻は「せせらぎが聞こえるおうちになったね。」と言って喜んだ。

